

## 亡き人に出会う

松前 一秀

葬儀が終わり、火葬場から自宅または斎場に、お骨が戻ってきた時に行うお勤めを「還骨勤行」と言いますが、私たちの住む地域では、「みっかのおつとめ」と言った方が一般的でした。

でした。と、過去形にするのは昨今では、「みっかなのか」とか「繰り上げ初七日」あるいは、もっと乱暴に「初七日」とか言って、ひとつ行事を省略する傾向にあるようです。また、都心部では、その日のうちに四十九日のお勤めまで、済ませてしまうこともあるようです。

このことの是非については、今回留保いたしますが、その「みっかなのか」の時のお話をしたいと思います。

通常「みっかなのか」の式次第は、阿弥陀経、正信偈同朋奉讃、お文の拝読、せいぜい長くて5分程度の法話の順で執り行っていますが、喪主である、亡くなられたお父様の娘さんが早とちりをして、お勤めの後すぐにご挨拶をはじめられました。

そのご挨拶の中でこのように語られたのです。

「お父さん、これからも出会い続けてください」と……。

普通、こういう時の挨拶では「どうぞ安らかに」とか「天国で幸せになってください」とか、そんな言葉が出てきます。

でも、その娘さんは、「これからも出会い続けてください」と言われたのです。

私はいたく感銘し、言葉もなく法話も省略して、「白骨の御文」を拝読しただけで退席したのでした。

### 親に死なれて はじめて親に出会うこともある

人はみんな三種類の親を持っている。

第一の親は生みの親である。戸籍簿にのっている親で、私たちの血縁の歴史としての親である。

第二の親は百面相の親。日常生活の中で顔を合わせている親である。自分にとって都合のよいときは良い親に見えるし、都合の悪いときにはガンコな、いやな親である。親が生きている間はお互いに、その時の喜怒哀楽の気持ちによって千変万化する。

第三の親は、死して遇う親である。生前は感情や意見の対立もあって、素直になれなかったが、お浄土へ帰った親は、私たちの悲しみや喜びをじっと見守り、常に私を念じておって下さるようである。

きっとその娘さんは、仏となられたお父さんに出会っていることでしょう。